

札幌大学総合研究 第2号 (2011年3月)

〈講演〉

高知県民の北海道開拓 ー北見・北光社を中心にー

白井 暢明

皆さん、こんにちは。今日は、高知県民の北海道開拓というテーマでお話させていただきます。私は元々は大学では哲学系の出身ですが、この10数年、北海道開拓の歴史の中で、特にキリスト教的な移民団体について研究をしてきました。その成果として今年(2010年)4月、『北海道開拓者精神とキリスト教』(北海道大学出版会)を出版しました。今日はその一部をお話しようと思います。

北光社の具体的なお話に入る前に、明治期の北海道への開拓移住の状況についてお話します。明治期、北海道にはたくさんの方が本州、四国、九州から渡ってきました。明治2年、維新後すぐの段階で北海道の人口は6万人と言われていました。もちろん先住民のアイヌの方々も含まれていますが、北海道は室町時代から少しずつ和人が入り、北海道沿岸の産業であるニシン、昆布などを本州に送るため、かなりの和人が入ってきました。しかし明治2年の段階では6万人です。それが明治政府の北海道開拓・殖民政策の結果、急に北海道の人口が増え、明治34年頃には100万人を超えました。大正7年には200万人を超えたと言われていました。現在は約560万人ですが、たった6万しかいなかった人口が、ほんの100年の間にこれだけ増えたのです。北海道は移民によって成立したことが分かります。

明治政府が北海道開拓・殖民を積極的に進めた理由として、第1にロシアの南下政策、つまりロシアが様々なかたちで政治的勢力を伸ばそうとしており、日本政府にとって重大な問題でした。つまり北辺の防備・防衛の観点で、うかうかしていると北海道はロシアに取られてしまうという危惧があったかと思います。第2に、北海道以外(内地)の人口が増加し、農地が非常に狭くなり、農村が非常に貧困化したことです。後に触れますが、北海道の広い土地は大変魅力的だったわけです。第3に、北海道は石炭等を中心とした鉱産資源が非常に豊富で、これを日本国の発展のため利用する。第4に、士族授産、要するに明治維新によって武士だった人々が禄を失ってしまった。廃藩置県で藩も殿様もなくなり、生計の糧がなくなります。国は、そうした人たちにどのように生計の基盤を与えるかを考

えねばならない。つまり、経済的基盤を失った士族に、生計の道を与えること、これを士族授産と言います。私の考えでは、大まかに言ってこの4つが挙げられると思います。

これらを基に、当時の明治政府は積極的に北海道への移民を奨励し、開拓をさせる政策をとりました。その結果、北海道にたくさんの人たちが入ってくるようになりました。初期の段階でまず「官募移民」があります。明治2～5年、開拓使が本州で募集した移民です。次に「士族団体移住」で、明治2～5年、生計の糧を失った士族がまとまって入ってきました。その中で最も主体になったのは、伊達藩です。伊達藩及びその支藩を含めた伊達一族は、明治政府（当時の官軍）に反抗しました。彼らはある意味、明治政府の敵だったことから、彼らに対しては何の保護もない状況の中で、たくさんの人々が北海道に来たのです。一番有名なのは亶理藩でしょうか。殿様と一緒に有珠郡にたくさんの人が入り、開拓にあたって一番成功したと言われます。その他にも室蘭に入った角田藩、幌別に入った白石藩、当別に入った岩出山藩など、伊達一門の士族がたくさん北海道に入ってきました。先述したように、彼らは国から何ら保護を受けず、かなり過酷な状況で非常に苦労したと聞いております。伊達藩以外にも佐賀藩（厚岸・釧路郡）、徳島藩（静内郡）などの士族集団があります。これが初期に入ってきた士族の団体移住です。

明治7年になると「屯田兵」制度が作られ、この名の通り開拓と同時に北辺の防備にあたる役割を持った組織が作られました。この発案者は黒田清隆と言われていますが、農民と軍人を兼ねる屯田兵が北海道の各地に配備されました。この屯田兵制度は、最初は士族中心でしたが、明治23年以降は平民が主体になります。明治32年に第七師団ができ、その役割を終えました。ここまで25年間、北海道37兵村、総数約4万人と言われています。屯田兵といわれる人たちは、先ほどの士族とは異なり、北辺の守りを担っているの、国から厚い保護を受け、様々な生活道具等を支給されています。その意味では大変恵まれた状況にあったのですが、やはり北海道で畑を耕作しながら兵役を勤めるのは大変過酷で、定着率はさほど高くなかったと言われています。

それと同時に、団体として入ってきたグループがあります。これが会社組織で、〇〇団体、〇〇社といった団体が各地に入っています。当時の政府あるいは開拓使が個人よりも団体の方が定着するだろうと考え、ある意味で様々な恩典を与え、団体移住を奨励しました。有名な団体では「開進社」（函館など）、私の研究対象である「赤心社」（浦河）、これはキリスト教徒の団体です。「晩成社」（帯広）は依田勉三で有名ですが、私から見ると宗教的団体とは言えないと思います。「北越殖民社」（江別・野幌）は関矢孫左衛門がリーダーでした。「十津川団体」は奈良県の十津川村が水害で壊滅したため集団で移住し、現新十津川町で開拓にあたりました。他に「三重県団体」（幌向）、「石川県移民団

体」(花畔)、「江波団体」(音更)、「加賀団体」(倶知安)、そして最後の「興復社」(十勝)は二宮尊徳の孫で尊親がリーダーとなり、現在の豊頃町に入りました。この興復社は宗教ではないのですが、報恩思想を持った団体です。内容については二宮尊徳の人物像を考えて頂ければお分かりかと思えます。私は今、団体だけを挙げましたが、圧倒的多数だったのは個人で移住した方々です。私は特に団体移住を中心にしております。

私の研究の主たるテーマは、その中でもキリスト教的な団体であります。明治期に移住してきたキリスト教的団体の例として5つあります。一番早いのは浦河の「赤心社」で、明治13年、神戸から赤心社という会社を作り移住をしてきました。社長の鈴木清をはじめリーダーたちは全員クリスチャンでした。彼らはいろいろ苦勞はしましたが、何とか生き残ったと言いましょか、現在でも唯一会社が残っています。浦河に行きますと赤心社商店があってその名前が残っています。次に入ったのが「今金・インマヌエル団体」、ほぼ同時期に、今日も触れます「浦臼・聖園農場」があります。インマヌエル団体は京都、埼玉から入植し、新島襄(同志社)の影響を受けた学生だった志方之善がリーダーになっています。同時に、たまたま埼玉から「聖公会」という少し違ったキリスト教の一派が入り、現在の今金町で協力して開拓し、町を造っていきこうとしました。しかし同じキリスト教であっても全く違った宗派なのでいろいろ確執があり、一緒になったり離れたり、という歴史があります。その結果、現在は教会だけが残っていますが、今金町の墓地には、他の所とはかなり雰囲気異なり、十字架がたくさん建っています。現在でもキリスト教徒の子孫の方々がたくさん住んでおられます。「浦臼・聖園農場」についてはこれから少しお話をします。「北見・北光社」も今日のテーマになります。同時期に、隣の遠軽町にもキリスト教的な団体が入っています。「北海道教育同志会」ですが、当時のキリスト教の代表的人物であった押川方義と、当時札幌の北一条教会の牧師であった信太壽之(東北学院での押川の弟子)が率いた開拓団体です。この北海道教育同志会には浦臼の聖園農場から、かなりの応援部隊が出向いています。北見・北光社、聖園農場、教育同志会は、ある意味で非常に強い関係があります。

このように5つの団体が入ってきましたが、そのうち浦臼・聖園農場、北見・北光社は高知出身です。今日はこの2つ、特に北光社をメインにお話したいと思います。まず聖園農場の概略ですが、リーダーの武市安哉は明治25年に北海道移住を決意しました。彼は、北見の北光社のリーダーであった坂本直寛と同様に、当時の土佐の自由民権運動で活躍していた人です。特に武市安哉は当時の国会議員で、その身分を捨てて北海道に移住したことになります。彼は坂本直寛と同じように途中にクリスチャンになります。土佐の民権運動は、明治政府の薩長閥に対して反抗しています。当時は北海道開拓用地払い下げ問題が

あり、自由民権運動の立場からすると、薩長閥を中心とした明治政府が腐敗している証拠であると、恰好の攻撃材料になりました。そこで彼は自由党に入っていました、その調査団として北海道に調査に来ました。もちろん彼はその前から、北海道に移住して開拓をしたいという希望を持っていました。北海道を実際に見て、北海道移住の決意を固めたと言われています。実際に団体を作って入ったのが明治26年7月になります。翌年、第二次移住者が入殖し、5月には教会ができます。聖園農場は特にそうですが、キリスト教徒の団体が入殖した場合、すぐに教会をつくり、毎朝の礼拝を始めています。北海道という気候の厳しい全く未知の土地に入ってきた人にとっては、このことが非常に大きな精神的支えになりました。ところが武市安哉はその年の12月に、青函連絡船上で急死してしまいます。つまりリーダーを失ってしまうのです。その後を引き継いだのが、娘婿の土居勝郎です。それに少し遅れて明治29年、坂本直寛が北海道移住の決意を表明し、8月に北光社の土地調査に訪れ、その際に同行した前田駒次は聖園農場のリーダーの一人で、同じ高知で坂本と武市は自由民権の闘士として活躍した仲間でもありますので、協力したわけです。クネネツ原野は北見周辺にあり、今の訓子府町あたりの原野を視察し、結果的にここに決めました。

明治30年、高知市で北光社を立ち上げ、規約を作り、5月に北見に入植してきます。言い忘れましたが、例えば北見、浦臼あるいは浦河といった町は、その当時ある程度の人住んでいましたが、彼らが入植する以前は町というものはなく、実際にはこの人たちが町の基礎を築いたことは間違いありません。つまり、現在の北見の町の基礎を築いたのは北光社であるということになります。明治31年、坂本直寛はなぜか浦臼の聖園農場に転居してしまいます。つまり、北光社を辞めて移住してしまう。また、北光社では明治33年になって初めて礼拝が開かれました。これが聖園農場との違いです。つまり、教会の組織化が非常に遅れたということです。それにより北光社は、団体としての成果を挙げるのがなかなか難しかったと言われています。

なお、聖園農場の1つの大きな特徴として、リーダーの武市安哉は亡くなりましたが、この人は本当に敬虔なクリスチャンで、人間的影響力を強く弟子たちに残しました。その1つとして、聖園農場からいろいろなところに移住し、そこで新しい町や村、コミュニティを作っていくという活動をしました。外国に行った人もたくさんおり、これが大きな特徴です。現在、名寄の更に北に美深という町があります。聖園農場の小笠原尚衛一家は美深に移住し開拓にあたり、教会を造りました。美深町の発展も、全てではないにしろ聖園農場から来た人たちが支えていたことになります。さらに、美深にたまたま来ていた近藤直作は聖園の人たちの影響を間接的に受け、クリスチャンになったうえ佐呂間に移り、開

拓に従事し教会をつくりました。また聖園農場からは、いろいろな人がアメリカ等に移住しています。しかし明治42年に聖園農場は終わりを迎えます。当時は土居農場と言っていました。北海道拓殖銀行に譲渡し、団体としての名称は消えてしまいます。これにはいろいろな原因がありますが、土居が道会議員になって農場の経営に差し障りが出たと言われています。同様に大正3年には北光社も黒田四郎に譲渡され、黒田農場になってしまいます。これも当時のリーダーであった前田駒次が道会議員になり、政治活動に忙しくなったため、似たような経過をたどっています。

以上は概略で、もう少し詳しいお話をしたいと思います。まず聖園農場のリーダーである武市安哉は、高知市の隣の南国市の郷土出身です。小学校の教職に就いたりしながら、明治9年に立志学舎、つまり当時の自由民権運動の元になった学校に入ります。明治12年には県会議員に当選、その後自由党議員として、坂本直寛とともに自由民権運動の闘士として活躍しました。18年にクリスチャンとなります。坂本直寛もそうですし、片岡健吉という当時の大物もそうですが、自由民権運動家はなぜかクリスチャンになる人が多い。どうして自由民権運動とキリスト教が結びつくのか、非常に大きな興味があり、これについては後に述べたいと思います。当時の明治政府にとって、当然自由民権運動は反政府運動のようなもので、弾圧の対象になります。高知の自由民権運動家たちも三大建白運動に関与して投獄されます。このとき、武市安哉も坂本直寛も同様で、皆牢屋に入っていました。恩赦により2年後に出獄した後、武市安哉は国会議員に当選します。ところが彼は、政治の世界がいかに墮落した汚れた世界であるかと幻滅し、これが北海道開拓移住の動機のひとつになっていると言われています。そして、前述した北海道開拓用地払い下げ問題に関する調査のため、北海道に派遣されました。その時に彼が最も感動したのは、北海道の鬱蒼と樹が茂った原始林、特にその広大さでした。そこで彼は北海道への集団移住を決意したと言われています。郷里に帰り同志を募って、明治26年に移住者を率いて浦臼に移住し聖園農場と名づけました。そして翌々年、青函連絡船上で急死します。死亡の理由にはいろいろな説があり、病気だと言われていますが、一部には暗殺説もあります。しかしその証拠は全くありません。

次に聖園農場の移住とその後の経緯を簡単に述べます。明治26年に第一次31名、翌年に第二次200名、第三次400名と次第に増えて、開墾は着々と進みました。移住当初、家もきちんと建っていない時期に茅葺の礼拝所を造り、毎朝の礼拝と日曜集會を欠かさなかったのです。翌年には教会の前身が造られ、日曜学校が開かれました。団体の運営はとても民主的に行われたと言われています。他の団体の場合は会社組織ですから、例えば株主総会等のかたちをとったそうですが、聖園農場の場合は皆で話し合い、全てを決めました。

規約も大変シンプルであったことが特徴でありました。留岡幸助は当時の空知集治監に勤めていましたが、彼が冬季学校を開設し、その後は今の遠軽に家庭学校を作ります。武市安哉は特に教育に熱心で、この留岡と交流があり、冬季学校に聖園農場から青年を出席させました。武市安哉はキリスト教的な精神に則った教育を考えていたと思いますが、弟子や子供たちの教育に熱心であったことが特徴であります。

武市安哉が亡くなった後は、武市と同じく自由民権運動に関わっていた、キリスト教徒で娘婿の土居勝郎が土居農場としてそれを継承します。彼は懸命に農場経営に努力し、一時は養蚕を導入し、北海道屈指の養蚕地として功績を挙げましたが、36年以降は道会議員になって土居農場の管理は停滞し、42年には北海道拓殖銀行に譲渡してしまいました。ここで聖園農場はその歴史を終えることになります。

なぜ聖園農場を立ち上げ、北海道に移住してきたか。私の本のタイトルは『北海道開拓者精神とキリスト教』で、研究の大きなポイントの1つは、開拓をどのように現実に行ってきたか、会社経営をどうしてきたかというより、どういう動機で団体を作り、北海道に入ってきたのか。もう1つは、北海道という過酷な自然環境の中であって、生活そのものも大変辛いものだったと思います。最初は何もなく、寒い冬にも荒野を拓いていくわけです。その中で、どのように自分達の生活を支えてきたか。その時に、ある意味強い精神力が必要です。私はそれを「開拓者精神」と名づけ、移住の動機と、過酷な自然環境の中でいかに仕事を続けたのか、他団体の場合、諦めてすぐに帰った人もいますから、過酷な環境の中で開拓事業を支えていく精神はどのようなものであったか、この2つを考えています。

そのうちの動機ですが、私は政治的なものと、経済的なもの、宗教的なものの3つに分かれると思っています。先ほども触れましたが、武市安哉がなぜこういうことを考えたか。彼は国会議員になりましたが、政治世界の不浄さを受け入れることができなかった。彼は非常に純粋なクリスチャンで、政治の世界とは馴染まないものがあつた。自分は政治家に向いていないという自覚が非常に強かったと言われています。これがまず1つ。この場合の政治的動機は、むしろネガティブな、否定的なものです。経済的動機としては、郷里の土地の狭さによる貧窮農民の救済で、その意識が非常に強かったと思います。後述しますが、当時、高知周辺の農民の生活は大変過酷なものでした。その理由の1つは、土地が非常に狭いことです。そういう人たちを何とか救うことができないか、これが武市安哉が強く考えていたことだと思います。そして最後に宗教的な動機ですが、政治とはある意味で外的、物質的な救済をもたらします。しかしそれでは限度があり、彼はキリスト教的教育によって、人間を内面的に救済する必要があると考えました。そしてそれと農業、つまり土地の開拓を結びつけ、新しいコミュニティが作れないかと考えたと思われま

武市安哉と聖園農場について崎山信義が書いた本には、移住者から聞き取った話や、資料を集めて書いた内容が載っていますが、一節を引用してみます。

「汽車で市来知（イチキシリ・今の三笠方面）にいく途中の石狩平野は、原始林と丈なす雑草に覆われた草原であった。…それは遠く目の届く限り続いており、北方にクマネシリ山脈、東の方に夕張山脈が、はるかに煙っているのみ。この雄大な景観と未開の沃土は安哉を圧倒し、感動させた。北海道へ来てから具体的な形をとりかけていた移住、“キリスト教精神による理想的な新農村の建設”という構想が、決定的なものとなって彼の全精神をゆさぶったのである。」

この記述の根拠は恐らく、安哉本人からではなく、安哉の話を聴いていた弟子たち、あるいはその子孫からの聞き取りが根拠になっていると思います。

高知の生活が農民にとって大変過酷な環境であったと述べましたが、高知県の行政図を示します。中央に高知市があり、右横に安哉の出身地・南国市があります。この地域の地形を衛星写真で見ると、北海道と四国の面積の違いが分かります。北海道はかなり大きく、今高知県といわれている地域は、四国の南半分でも全体的面積からいってもかなり狭い。余談ですが、最近正確な日本地図を余り見る機会がないかと思っています。私はいつも言っているのですが、例えばNHKテレビの天気予報図は南から見ているので歪んでいます。北海道がとても小さく見えます。下手をすると九州の方が大きく見えます。私は何年も前からNHKに注意しているのですが、縮尺の歪んだ地図を見せられていると、間違った知識を与える。現に今子供たちに聞くと、北海道の広さを分からず、九州と同じくらいだろうと思っています。実は北海道は広いのです。一方、四国は狭い上に山が多く、平地がほんの僅かしかない。土佐周辺は平らですが、それ以外はほとんどが山地なのです。つまり、畑を作るにしても平地が少なく、農業は非常に効率が悪く、コストがかかり、地形的に見ても農民は厳しい状況にあったことが分かります。彼らはこういうところから北海道に来たわけです。原始林に覆われているとはいえ、まず土地の広さに圧倒された。これだけの土地があれば、努力次第でいくらでも開拓し、農業を営むことができると考えたと思います。次に特色を幾つか挙げたいと思います。まず武市安哉のリーダーとしてのカリスマ性ですが、先ほどからお話しているように、彼は完全に政治の世界に幻滅しました。自分には政治は向いていないということから始まっています。そしてキリスト教的教育と実践による、民衆の救済者となることを決意します。彼の生きている時間は短かったのですが、彼の考えに賛同してついて来た人たちに大きな影響力を与えました。彼はとても人格者で、人間としても素晴らしかったそうです。人間としての影響力が非常に強く、類まれな指導力を発揮しました。また、彼と一緒に移住してきた人たちの中に、いわゆるインテリが大変多

かったことは、他団体に比べてたいへん大きな特徴です。同志社大学生をはじめ、例えば早稲田大学を卒業した人、福沢諭吉の弟子など、非常に知的水準の高い人たちが聖園農場の指導者になります。全員クリスチャンで信仰が一致していることと、非常に知的水準が高かったことが聖園農場の大きな特徴であり、その結果として、聖園農場だけでなく様々なところに移住し、新しい町・村を造る。あるいはキリスト教の団体を作り、教会を建てるといった活躍の基になっています。

また、新天地への展開、真のフロンティア・スピリット、いわゆるアメリカ的に新しいところにどんどん進出し、開拓していく。このフロンティア・スピリットはプラス面ばかりではありませんが、こうした特徴があります。前田駒次は武市安哉の跡を継ぎ、土居農場でもリーダー的役割を果たしましたが、彼は北見・北光社へ移り、坂本直寛に代わって実質的なリーダーになります。前田駒次は自由民権運動の仲間ですが、野口芳太郎は早稲田大学卒の大変なインテリで、遠軽の教育同志会の指導者として転出していきます。聖園は知的な核となり、いろいろな人を輩出しました。大久保虎吉一家、斉藤為熊一家、小笠原尚衛一家などが美深に移住、小笠原一家はこの後ブラジルへ渡ります。崎山比佐衛はブラジルに渡り、「アマゾンの父」と呼ばれる存在になります。新十津川村から美深に入植した近藤直作は、美深に移住してきた人たちの影響を受けて武市安哉の精神を受け継ぎ、明治39年に佐呂間に転出し、そこに佐呂間教会を造りました。このような影響力を与えていました。

写真を何枚か見て頂きます。これは浦臼町にある聖園農場創始地の記念碑です。これは初期の聖園教会の古い写真で資料館にあります。現在の聖園教会です。これは町に入ると左手にすぐ見えます。これは聖園から美深に移った人たちが造った教会で現在の姿です。近藤直作が造った佐呂間教会、これも現在のものです。私は全部訪ねたのですが、例えば近藤直作の関係者、長老であった人の子孫などが必ず残っておられ、話をしたり資料を見せてもらったりしながら私の研究が進められたわけです。ここまでが聖園農場で、これから本論になりますが、北光社のお話をしたいと思います。

北光社のリーダーは坂本直寛で、坂本龍馬の甥にあたります。最近なぜ坂本龍馬が人気かということ、もちろんNHKの大河ドラマの影響でしょう。それをご覧になった方はお分かりでしょうが、龍馬は一番下の子供です。長姉・千鶴の子供が坂本直寛で、坂本龍馬の甥になります。ただ兄の権平に子供がなかったため、直寛はその兄の養子になります。この時代は家が大事ですから、男の子がいないと必ず養子をとって家を継がせました。ですから血縁関係がどうなっているか、とても難しい。いずれにしても坂本直寛はこうした家に生まれました。彼は武市安哉と同じく立志社で学び、自由民権時代、その闘士として当

時有名だった馬場辰猪、植木枝盛（日本国憲法の草案を書いたとされる）と並び、自由民権の三大論客と言われたそうです。抜群の英語力で、ミル、ベンサムなど当時はほとんど読む人がいなかったような西洋の本を原文で読みました。明治17年には高知県会議員、翌年にキリスト教徒になります。明治20年、政府に反抗したため入獄し、2年後に出獄しました。

彼もかねてから移住・殖民に関心を持っており、結果的に武市安哉の聖園農場での成功に触発されました。片岡健吉は、全ての会社組織のキリスト教的団体の責任者になっていますが、実際には北海道には来ていません。後に国会議長を務めました。明治29年、坂本はこの片岡健吉と共に北光社を立ち上げ、初代社長に就任しました。明治30年、移民団を率いて北見に入殖しました。ところが1年も経たないうちに澤本楠弥に管理を託し、北見を去って一度高知に帰り、翌年には家族を引き連れて聖園農場に移住してしまいます。これは一つの謎であります。結局彼は、政治的活動への執着を捨てることができなかつたのが最大の原因だろうと考えられています。明治35年、キリスト教主義の日刊新聞『北辰日報』の主筆も務めました。彼のやりたかつた政治活動がここで実現したのですが、それもすぐに辞めてしまいます。最終的には旭川教会の牧師として大変優れた活躍をします。特に監獄伝道などで非常に大きな影響を与えたと言われています。彼は弁舌が素晴らしく、人を感動させる力を持っていたそうです。明治43年、札幌で亡くなっています。

家系図を見ると、龍馬には乙女、栄、千鶴という姉が3人おり、長男が権平です。千鶴が高松権蔵のところに嫁ぎ、その次男として生まれたのが直寛です。昔は南海男と書いて「なみお」と言っていました。坂本直寛は長男・権平の養子になります。直寛には妻が代々4人おり子供もたくさんいますが、孫の直行は画家として有名です。

これは明治16年9月、自由民権運動をバックアップしていた『土陽新聞』に描かれた、坂本直寛が演説している姿です。

これは坂本直寛の兄にあたる高松太郎という人です。坂本龍馬とは実の兄弟ですが、坂本龍馬の思想に共鳴し、一緒に行動しています。亀山社中、海援隊などにも入り、龍馬の活動を支えた一人です。彼は明治になって弟の坂本直寛の家で一緒に過ごします。その後函館で政府の役人を何年か勤めた後、帰って直寛の家で暮らすことになります。ですから彼は坂本龍馬と非常に関係が深く、行動を共にしています。坂本直寛はほとんど龍馬と一緒に行動した形跡はありません。後に聞いた話では、直寛は自分の叔父である龍馬についてほとんど語らなかつたそうです。理由は不明ですが、今でこそ坂本龍馬は大変有名ですが、明治維新の頃はさほど有名ではなかつた。むしろ無視されていたわけです。明治維新実現のために活躍したはずですが、かなりマイナーな存在と言いますか、ほとんど無視さ

れていた状況だったので、直寛が語らなかつたのは不思議ではないかもしれません。あるいは、何らかの反感があつたのかもしれません。ただ兄は坂本龍馬と一緒に行動しました。私も感ずるのですが、坂本龍馬は確かに素晴らしい人で私も好きですが、今はちょっと人気先行のところがあるかと思います。司馬遼太郎をはじめ色々な人が坂本龍馬を描いたことで、ちょっと持ち上げられすぎという気がしないでもありません。

さて、どうして自由民権運動とキリスト教が結びつくのか。ほとんどの人がクリスチャンになるのか。私がまず理解できないことの1つには、当時の自由民権運動はある意味で一種の民主的な運動ですが、一方ではかなり国家主義的、つまりナショナリスティックな性格をもっています。まず大事なのは個人よりも国家であるという思想が共通しています。キリスト教は唯一絶対の存在は神であり、人間の中に神に匹敵する者はおらず、日本でいえば天皇制に対して批判的であつたはずです。ですから江戸時代も明治に入ってから、クリスチャンはある意味で弾圧されたわけです。どうして自由民権とこのようなキリスト教が結びつくのか、ちょっと不思議なことでもあります。

まず1つ考えられるのは、自由民権運動の創始者と言われる板垣退助など、当時の反政府指導者が、西欧民主主義思想の根底にはキリスト教があると考えました。彼自身はクリスチャンにはなりませんでしたが、キリスト教を非常に高く評価し、西洋の新しい思想を学ぶためにキリスト教の勉強を勧めたと言われていました。つまり当時、西洋の政治的思想、いわゆる民主主義思想の根底にはキリスト教があると考えられていた。これは事実として当たっていないわけではなく、もちろんキリスト教は関係があり、思想的基盤が類似している点が考えられます。とりあえずキリスト教を知らねばならないということから、いろいろな話を聞いたり、勉強した結果としてクリスチャンになったことは考えられます。

次に政治的状況と社会的基盤の同一性です。天皇制の確立を急ぎつつあつた明治政権にとって、当時の自由民権運動は反政府運動であり、キリスト教もその思想性からして、天皇を中心とした国家体制に対して批判的です。どちらも弾圧の対象となり、共通性があります。自由民権運動がなぜ高知で広がったか。皆さんも歴史を見て頂くとお分かりのように、江戸幕府を倒し明治維新を行うために、薩摩、長州、土佐、肥前の諸藩を連合させたのが坂本龍馬ですが、明治維新後実権を握つたのは薩摩です。土佐藩には例えば後藤象二郎がいましたが、すぐに外されてしまう。薩摩の西郷隆盛と一緒に征韓論で排除されてしまうのですが、結果的に土佐は当時の政治の中枢から締め出されてしまった。それが当時の薩長閥に対する反政府運動と根底で結びついています。この点を頭に入れておいて頂きたいと思います。そこで中央政府から外された人たちと、やはり政府の弾圧の対象であつたキリスト教には、ある意味共通性があつたと考えられます。思想的なものというより、

社会的基盤の同一性があったのではないか。キリスト教信仰がどの程度彼等の中に定着していたか、一人ひとり違いますし明言はできませんが、外から見ている限り、彼等の非常にナショナルスティックな考え方などから考えると、今から見たキリスト教本来の信仰と一致しているのかどうか、疑問を感じるところがあります。

それに関係して心理学的・社会学的要因として、彼らが政治の中枢から追い出された時期、つまり彼等の「非政治化」とキリスト教に入信した時期が重なっています。政治から排斥された心の負い目を、別なもので自分のアイデンティティを確立したいという心理的なものがあったのではないか。これが彼らがキリスト教に入っていく、1つの心理的原因になっているのではないかと考えられます。マックス・ウェーバーは「知識人の現世逃避」と言っていますが、政治の中枢から外れた者が宗教に向かうことは、世界的に見られる類型的な現象であると言われています。「救済の内面化」ということが考えられます。

さて、北光社設立の一般的動機ですが、澤本楠弥は北光社を立ち上げた際の副社長（社長 坂本直寛）で、実際の仕事は彼が行っていました。その澤本が書いた文章を読むと、いわゆる表向きの動機が分かります。これは北光社だけでなく、他の団体も似たようなことを言っています。『拓地殖民という声が一方から挙がると、世の中の人々は一躍これに注目し、日本国民は新天地を洋の東西に求めてありとあらゆることを試みている。しかしよく考えると、今日の我が国の政治的・経済的及び社会的問題を解釈する上で、その最も近道は北海道の拓殖事業である。我々同志は深く感ずるところあって、もっぱらこの事業に力を注いで剛健な理想の新村落を北海の天地に造り、自分の希望に合わせてこれを形造り、これを陶冶し、そうすることによって国に報い、国民を救おうというかねてからの志をかなえようと望み、それ以来相談し合ってひとつの集団を組織した。北光社それである…。よってここに楽天的村落を建設し、天を望んで地を開拓、天を頂いて立地し、圧政なく、束縛なく、迷信なく、罪悪なく、馬鹿げた義理や習慣や風俗もなく、家屋があり、幸福があり、自由があり、人情もある一種の理想社会を造りだすのも実に人生最高の快事ではないか。才能ある人々よ、ふるって北光社の旗印を見つけて集まり来ることを望む』。これはある意味でPRです。北光社を作り、北海道で新しい理想の村を実現します。賛同する者はどうぞ集まって一緒にやりませんかということです。ここにはキリスト教とは一言も出てきません。これはどの団体もそうで、キリスト教を前面に出すと一般の人たちが入りにくくなるからです。しかし非常に理想的なことが書かれています。

もう1つは、国という立場から、日本国にとって北海道の開拓は非常に大事なのだという考え方が基本にあります。もちろんこうした文章は賛同者を募る意味もありますが、団体を作って北海道に移住する際には、国や道庁から認可を受けねばなりません。そのため

のPRでもあるわけです。私たちは日本国の発展のために北海道に渡るという、ある意味ナショナリズム的なことが書かれています。これが一般的な動機になります。ただ、本心がこの通りかは別の問題になります。

さて、坂本直寛の思想を幾つか紹介します。まず彼はクリスチャンになりますが、このように言っています。『神がモーセをしてヘブライ国民建設の偉業を為さしめ給ひたる事跡を深く心に銘するに至り、予は之によりて、若し聖意に適はば将来神によりて或る事業を試みんと希望を養いぬ。是れ予が拓殖事業を經營せんとする思想を起こしたる基にして…』こういう文章を書いています。つまり、キリスト教の歴史にある、モーセによる出エジプトによってパレスチナの民が今の地に国を造った。自分もそれに倣おう。キリスト教の中には、移住して新しい国を造るという発想があります。その代表は清教徒の新大陸アメリカへの移住です。ピルグリム・ファーザーズのイメージをここに重ねているのだと思います。また別に手紙の文章ですが、『北海道に拓殖の事業を設計し、将来日本社会にひとつの潔き義に生きる神の国をつくりたい』とも言っています。また、『伝道と教育を以て将来ここに聖村を建設する考えである』。これか彼のキリスト教信仰の立場から言った北海道開拓動機になると思います。

次に彼が新聞に寄稿した「北海道に拓殖事業を興さんとする意見」から引用すると、『我が北海道は、いわゆる《北門の鎖鑰（戸締り）》である。殖民たるものはこのことをいつもよく心構えておかなければならない。まして、最近欧米諸強国が東アジアに権力を振るおうとして互に政略を画しつつある時勢だけになおさらのことである。また、北海道の地はいわゆる新開の殖民地であるため、ここに善良なる習慣を作ることがきわめて肝要である。もしこのような土地に最初に悪習慣を作るならば、その将来は推して知るべしである。今日この地における社会の状態はすでに嘆息せざるをえないものである。もし今すぐに厳肅、勤勉、高潔なる良風俗を興し、現に流行している飲酒・ばくち・風儀壊乱などの悪弊に反対する殖民地を建設し、自ら治めて国民自治の基を開かなければ、北海道の将来はきわめて憂慮、慨嘆すべき状態に陥る恐れがある。従って、模範的な殖民地を設置して良村落を建設し、それによって他の殖民地を感化することはまさに今日の急務である。これが我々が北海道に拓殖の事業を經營する理想であり、目的である」。既に北海道に開拓移住してきた人はたくさんおり、彼に言わせると、その人たちの倫理的・道徳的な水準が非常に低いと嘆き、後半には坂本直寛の思想の一端が表されています。つまり、村を作ると同時に道徳的・倫理的に優れた人々のコミュニティを作る。その際にキリスト教が必要になるわけです。

次にキリスト教と異なる面から、彼の思想を紹介します。彼は開拓思想をいろいろと

ところで語っていますが、大変優れたことを言っています。例えば「北海道の発達」という文章では、「北海道開発当局に明確な拓殖方針がない。当時の『大土地所有』と『小作主義』の方法では、小作人をただ疲労させ、自由を与えず牛馬の如く労働させるのでは「北門の鎖鑰」としての役割を果たせない」と書き、つまり彼は、当時の明治政府による北海道開拓の方針そのものが間違っていると述べています。移住した人たちに、もっと自由と自治を与えねばならない。当時は基本的に金持ちがたくさん土地を所有し、農民を雇って小作料を取っていました。この状態では本当の北海道の開拓者にはならないと述べています。

「最初に北海道にきた殖民の多くは山師的人物もしくは内地の失敗者であって、私利私欲にとらわれ、道義心に欠けている」。「北海道開発当局の保護政策が道民の“依頼心”を強めた。従って、北海道も英国植民地のように政府の干渉を受けず、北海道人は『自治独立の精神』を持つことが必要である』。彼はイギリスの植民地を非常に高く評価しています。この文章は、現在の北海道の政治家に読ませたいくらいです。当時、坂本直寛は既に北海道民の依頼心を否定し、自治独立しなくてはならないとしています。素晴らしい思想で、まさに今言いたいことだと私は思います。国依存、中央依存、北海道は国の補助なしにやっていけない、そういう現状を見ると、もし坂本直寛の思想がもう少し早く北海道民に浸透していれば、北海道はもっと素晴らしくなったかもしれないと思います。彼は単にキリスト教信仰だけでなく、自由民権の闘士として政治的な思想を高らかに述べ、北海道に理想を託しています。

「人は人格を必要とする。品格は自治の精神から生まれる。自治の精神なければ村落の品格はない。これがなければ立派な植民地とはいえない。要するに、人は正直で真面目でなければならない」この辺がピューリタンの倫理観です。「いわゆる小作主義をとり、地主だけが多く儲けて小作の利不利を試みないようでは自治の精神を人心に吹き込むことはできない。小作人とするよりも小地主として少なくとも小土地を与え、自治独立の人としなければならない。また教育もしなくてはならない」。最後に宗教について『人の人格を高めるものこそ宗教であり、今日の北海道の有様を見ればとくに宗教的徳の修練を必要としている。つまり、ピューリタンのようなエートス（気持ちのあり方）は宗教によらなければならない」。

彼はまた、北海道の文化はどうあるべきか非常に冷静に述べています。「北海道はその位置からすれば北緯41度20分から同55度（45度の誤り―筆者）30分の間に横たわる島であり、気候は寒冷である。従って内地とは事情が異なっているのであるから、拓地殖民の方法もまたおのずから特別な考え方をしなければならない。私はここで北海道の衣食住に

ついで多少の私見を述べたい。第一に家屋の構造や移民の衣食等はこの地の環境に適す得るものを考案して将来の北海道生活の基礎を築くべきである。北海道の生活は内地とくに暖地の慣行に習うよりはむしろ欧米北部国民の生活に習う方が優れていると考えるべきである」。これも大変な卓見だと思えます。例えば旭川などで保存されている屯田兵屋などをご覧になるとお分かりのように、これは本州の住宅様式をそのまま持って来ているのです。スカスカの住宅で、よくマイナス40度にもなる地で生きていたと思うほどの和式建築です。現在は北海道の建築は全く変わりました。気候風土が全く違うのですから、それに適した衣食住の文化があつてしかるべきだと言っています。これももっと早く彼の意見を取り入れるべきではなかったかと思えます。

その結果として、「北海道は米作より麦など穀類を主力とし、製粉して東シベリアなどに輸出すること」と、西洋的な生活様式を取り入れるべきと言っています。また、「津軽海峡が遮断されても、北海道民が生き残ることを可能にする自立農業、つまり自立経済システムを構築するためにも必要である」。これも今まさに言いたいことです。さらに、「北海道の社会生活は内地より卓越したものになることも不可能ではない。それだけではなく、私をはじめ述べたように、移民の品性に関する教育を適切に行つた場合は、わが日本帝国の将来における真の文化は北海道で形成され、北海道は我国の改善・進歩の先進地となり、あたかもアメリカ合衆国におけるニュー・イングランドと同じ地位を占めるのも困難なことではない。即ち、北海道は物質的にも精神的にもわが帝国の“母国”としての地位を手に入れるべきである。いわゆる後なるものが先になるべきだということである。このような理想と希望をもって北海の拓殖事業を企画することもまた快いことではないか。我々はこのような理想と希望をもって北海の植民地を設置しようと望むものである」と、北海道の可能性を高く評価しています。

このように、坂本直寛が北海道に関していかに高い理想を掲げていたかが分かります。ただ、これらを見て、まさに坂本龍馬の意志を継いだものだという説もありますが、そのあたりはまだ不明です。確かに坂本龍馬も北海道移住・開拓を考えていましたが、具体的な内容、どういう国にしたいのかということについてはあまりよく分かっておりません。もしかしたら受け継いでいると言えるかもしれません。時間がないので、移住に際しての規約についてはプリントを参照してください。

その後の状況ですが、坂本直寛はあれほど開拓の高い理想を訴えながら、なぜか北光社から撤退してしまいます。その結果、精神的支柱を失つた北光社は大変険しい道を進むこととなります。それを受け継いだ前田駒次が実務的に立て直し頑張りましたが、最終的に崩壊してしまいます。聖園農場とは少々異なり、リーダーたちは士族でキリスト教徒でし

たが、移住者の大半は農民でした。クリスチャンでもなければ、さほど高い教育を受けていない人たちが圧倒的多数でしたから、その意味で二重構造があったのではないか。坂本直寛の理想を受け継ぎ、それを実現しようとする層が欠けていたことがあると思います。また聖園農場とは違い、人々の精神的な絆・支えになる宗教の環境整備が遅れたことがあります。最初の礼拝が行われるまでに3年、教会ができるまで6年かかっています。もしもっと早くできていれば、過酷な生活に耐え切れず逃亡する人がもっと減ったかもしれません。

なぜ彼が戦線離脱をしたか。彼に言わせると、政治的活動に未練があり、北見よりは少しでも札幌の近くに住みたいと思った。恐らくその背景には、彼と、彼の下にいるリーダーたち、あるいは一般の移住民たちとの間に、何らかの不和があった可能性があります。私はそういう背景を想定しており、彼は居づらくなって、「実務は澤本が行うので、私はもういる必要がない」と少し無責任なことを言っており、ここが彼の不可解な点です。

この写真は北海道に移住する前に高知で撮った写真です。中央の直寛の右隣が兄の高松太郎で、坂本龍馬と一緒に活躍した人です。この直後、彼は聖園農場に移住します。孫の坂本直行は画家として有名で、六花亭の包装紙の絵でも知られています。北光社の記念碑が北見市にあり、「北光社農場本部跡」と刻まれ入植者の名前があります。後の指導者になった前田駒次が北光社を支え、北見開拓の実質的な基礎を築いた人と言われています。高知市の濃人（のうにん）町には北光社移民団の出航記念碑があります。「北光社移民団出航の地」とあり、ここから船に乗って北見に向かいました。地図が描いてあり、非常に長距離を航海したことが分かります。病気になったり、子供が30数人亡くなったり、たいへんな苦勞をして到着しています。高知市と北見市は、現在歴史的な関係から姉妹都市の提携をしています。

最後に、北光社に限らず、北海道に移住してきた5つのキリスト教的団体に共通した特徴として、開拓者精神史上何が言えるかをまとめてみました。① キリスト教信仰は移住者に対して、北海道の厳しい自然や過酷な社会環境の中で生き抜くための個人的・内面的の抛り所を与えた。② キリスト教信仰は古い日本的共同体の中心原理である「地縁」的結合から“離脱”のエネルギーを与えた。キリスト教信仰はそうしたものを持っているということです。土地に縛られず、新天地に行こうというモチーフがあります。③ 封建的なタテの人間関係とは対照的なヨコの絆の強化による、ある意味民主的なコミュニティ形成という社会的機能を持ったのではないか。④ 出身地が異なる人々や異文化が混在する地域に、教会を媒介とした新しいコミュニティ・アイデンティティを形成した。これはキリスト教に限らず、仏教や神社などもその土地に必ず入ってきて、宗教が地域の精神的連帯

の新しい絆になります。⑤ 礼拝所や教会を通じて、メンバーや子供に対する教育の場を提供した。この機能はキリスト教が特に強いと思います。非常に教育を大事にし、移住者たちによって作られた最初の教育の場が、のちに小学校として発展するなど、小学校の基を築いた例が多くあります。⑥ 教会はある意味西洋文化との接点であり、いろいろな文化的、芸術的なものを与えた。こうしたことがキリスト教的な移住団体の、全体的な影響としてあるのではないかと思います。

少々駆け足になりましたが、残念ながら時間となりましたので、私の話をこれで終わらせて頂きます。ご清聴有難うございました。

※この講演は、2010年11月10日、札幌大学附属総合研究所が主催して行われた第2回講演会の記録である。



明治政府の北海道開拓・殖民政策の目的

- 1 欧米列強への対抗、近代化を基本にした対ロシアの北辺防衛
- 2 内地の人口増加と農地の狭域化問題(農村の貧困化)
- 3 北海道の資源の開発・獲得
- 4 士族授産(特権的身分を剥脱され、経済的基盤を失った士族に生計の道を与えること)

明治期の北海道団体移住①

1. 官募移民: 明治2~5年、開拓のために開拓使が本州等で募集した移民(移民扶助規則、墾農規則に基づき保護)。根室、宗谷、樺太へ農工民約500人(明2)、札幌付近へ農民700人(明2-3)、酒田、柏崎から)、日高国西舎村、梓田村へ農民167人(明4、長崎、熊本両県から)など。
2. 士族団体移住: 明治2~5年、主として旧幕府側の敗残士族が、政府による藩藩・軍士族・寺院などへの分領支配に出願したもの。沙流郡へ約210人(仙台藩)、室蘭へ73人(角田藩)、有珠郡へ1083人(五稜藩)、幌別郡へ151人(白石藩)、厚田郡へ161人(仙台藩岩出山)、瀬棚、歌棄、山越群へ209人(斗南反)、厚岸・釧路郡へ151人(佐賀藩)、静内郡へ548人(徳島藩、福田)など。
3. 屯田兵: 明治6年、開拓次官黒田清隆の建議で、軍人と農民を兼ね、北方の守りを任務とする屯田兵制度が作られた。当初兵士は道南および東北3県の貧窮士族を対象としていたが、明治23年以降は平民召募が主になった。明治32年、第七師団(その前身は東北歩兵旅団)が、道南に開拓使の官募移民と併せて移住した。

明治期の北海道団体移住②

4. 会社組織、農民団体: 明治20年代以降は、会社組織による起業的な移住や会社に類似した結社・団体移住、自作農をめざす農民団体の移住、最初から小作人を募集する小作農場の移住、そしてこれらの補充のための個別の農民移住が主流になった。開進社(明12、函館などへ)、和歌山県士族、岩橋権輔の発起赤心社(明13、荻伏(現浦河)へ)、神戸から晩成社(明15、帯広へ)、依田勉三ら静岡県から(ひとつなへ)北越移民社(明19、江別、野幌へ)、主上新潟から十津川団体(明22、新十津川へ)、奈良県十津川から三重県団体(明26、幌向へ)、三重県から石川県移民団体(明28年、花咲へ)、石川県から江波団体(明29、音更へ)、富山県から加賀団体(明30、倶知安へ)、加賀から興復社(明30、十勝国豊頃村へ)、福島から、二宮尊徳の孫、尊親



聖園農場、北光社関係年表(1)

明25(1892)
武市安敏、「北海道開拓用地払い下げ問題」に関する自由党調査員として奉道、北海道移住の決意を固める。

明26(1893)
7月 聖園農場(高知殖民会)、土佐から現浦臼町に入植。

明27(1894)
3月 聖園農場に第二次移住者入植。
5月 聖園農場に「日本基督教聖園講義所」開設、礼拝と日曜学校、児童の教育を始める。
12月 聖園農場のリーダー武市安敏、青函連絡船上で急死。

明29(1896)
2月 坂本直喜、北海道開拓移住の決意を表明。
8月 坂本直喜、前田利次、澤本村幹ら、北光社の土地調査のため、クレンペック(現)視察旅行。

聖園農場—移住とその後の経緯

明治26年の第一次移住(31名)の後、翌年の第二次移住(200名)、翌々年の第三次移住(400名)が行われ、開墾は着々と進んだ。当初から武市の強い感化力と指導のもとで、益々の礼拝所(祈りの家)での毎週の礼拝と日曜集會を欠かさない。翌年できた「日本基督教聖園講義所」では礼拝と日曜学校が開かれた。団体の運営は會議で民主的に決められた。

武市は教育に非常に熱心で、明治27年に空知集治監の教諭留置同幸助が開校した「冬季学校」に聖園農場から8名の青年を出席させている。

明治27年12月に武市が急死した後は、娘婿の土居勝郎(武市と同じく自由民権運動に関わったキリスト教徒)が土居農場として継承した。彼はその規模を拡張する一方、養蚕を導入して一次北海道開拓の養蚕地にするなどの功績を挙げたが、明治36年以降、彼が道會議員になってから土居農場の管理は停滞し、明治42年、土居農場は全てを北海道拓殖銀行に譲渡した。その歴史を終えた。

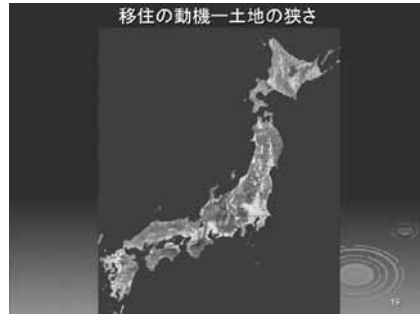
聖園農場—移住の動機

①政治的動機(ネガティブ)
安敏が政治世界の不浄さに対する失望
自らの資力が政治家に向いていないことの自覚

②経済的動機
郷里の土地の狭さに悩む貧窮農民の救済

③宗教的動機
政治的手法による民衆の救済から、キリスト教的教育による人間の「内面からの改革」による救済への転換

「汽車で市来知へいく途中の石狩平野は、原始林と丈な雑草に覆われた草原であった。...それは遠く賑の賑く限り続いており、北方にクマナシリ山脈、東の方に夕張山脈が、はるかに煙っているのみ。この雄大な景観と未開の沃土は安敏を圧倒し、感動させた。北海道へ来てから具体的な形をとりかけたという移住、「キリスト教精神による理想的な新農村の建設」という構想が、決定的なものとなって彼の全精神をゆさぶったのである。」(徳山信興「ある自由民権運動者の生涯と思想」)



聖園農場—その特色(1)

1. 武市安哉のリーダーとしてのカリスマ性
政治から完全に決別し、キリスト教的教育と実践による民衆の救済者となることを決意した武市安哉は、すべての移住者に尊敬され、たぐいまれな指導力を発揮した。
2. 移住者の知的水準の高さ
武市の人間性と理想に共鳴して移住団体に加わった者の中には、有為な人材、インテリの数がきわめて多かった。彼らは武市の精神と理想を受け継ぎ、その後の聖園農場の維持と、次項にみられるように、北海道各地でのキリスト教精神による教育とコミュニティの形成に大きな貢献をなした。



北光社—リーダー像

坂本直寛:坂本竜馬の甥(竜馬の長姉千鶴の子、後に長兄権平の養子となる)として生まれ、長じて立志社を志し、立志学舎で学んだ。自由民権時代には馬場辰猪、種木枝盛と並んで自由民権の三大論客と称された。抜群の英語力でミル、ペンサム、スペンサーなどの原著を熟読していたといわれる。明治17年には高知県会議員、翌年受洗してキリスト教徒になった。

明治20年三大建白運動に参加し、武市安哉らとともに入獄、2年後に出獄した。かねてから移住殖民に関心をもっていたが、同志武市の聖園農場などに触発されて、明治29年片岡健吉らとともに北光社を立ち上げ、その初代社長に就任した。明治30年、移民団を率いて北見の移住地に入った。

しかし、その年の秋に種々の理由から北光社の管理を澤本楠弥に託して北見を去り、翌年一家で浦臼の聖園農場に移住した。政治的言論活動への執着を捨てがたく、明治35年には札幌の基督教主義の日刊新聞「北辰日報」の主筆も務めた。その後旭川教会の牧師となり、宣教伝道などで大きな貢献をなした。明治43年





北光社設立の動機(5)

坂本直寛の開拓思想④「北海道の発達」(2)

- ・「人は人格を必要とする。品格は自治の精神から生まれる。自治の精神なければ村落の品格はない。これがなければ立派な殖民地とはいえない。要するに、人は正直で真面目でなければならない。いわゆる小作主義をとり、地主だけがよく働いて小作の利不利益を試みないようでは自治の精神を人心に吹き込むことはできない。小作人とするよりも小地主として少なくとも小土地を与え、自治独立の人としなくてはならない。また教育もしなくてはならない。」
- ・人の人格を高めるものこそ宗教であり、今日の北海道の有様を見ればとくに宗教的徳徳の修練を必要としている。つまり、ピューリタンのようなエーツ(心志)は宗教に与らなければ得られない。」

北光社設立の動機(6)

坂本直寛の開拓思想⑤ 北海道文化論(1)「北海道の農業に就いて」より

- ・「北海道はその位置から見れば北緯約41度20分から同55度(45度の間違い)30分の間に横たわる島であり、気候は寒冷である。従って内地とは事情が異なっているのであるから、拓地殖民の方法もまたおのずから特別な考え方をしなければならぬ。私はここで北海道の衣食住について多少の私見を述べたい。第一に家屋の構造や移民の衣食等はこの地の環境に適するものを考案して将来の北海道生活の基礎を築くべきである。北海道の生活は内地とくに暖地の慣行に習うよりはむしろ欧米北部国民の生活に習う方が優れていると考えるべきである。」

北光社設立の動機(7)

坂本直寛の開拓思想⑥ 北海道文化論(2)「北海道の農業に就いて」より

- ・以上のことから、北海道農業は米作よりは麦などの穀類を主力とし、製粉して東シベリアなどに輸出すること、そして玉ねぎ、馬鈴薯を生産して豚肉、牧牛、養鶏を盛んにし、北海道の食生活も西洋流にすべきである。このことは人種の改良にも役立つ。
- ・また、これらのことは、外患(外からの紛争)によって津軽海峡が遮断された場合にも北海道民が生き残ることを可能にする自立農業、つまり自律経済システムを構築するためにも必要である。

北光社設立の動機(8)

坂本直寛の開拓思想⑦ 北海道文化論(3)「北海道の農業に就いて」より

- ・「北海道の将来の発達については、もし先に述べたような生活上の方針に従って進めた場合、北海道の生活社会はむしろ内地より卓越したものになることも不可能ではない。またそれだけでなく、私がはじめに述べたように、移民の品性に関する教育を適切に行った場合はわが日本帝国の将来における真の文化は北海道で形成され、北海道は我が国の改善・進歩の先進地となり、あたかもアメリカ合衆国におけるニュー・イングランドと同じ地位を占めるのも困難なことではない。即ち、北海道は物質的に精神的にもわが帝国の「母国」としての地位を手に入れるべきである。いわゆる後なるものが先になるべきだということである。このような理想と希望をもって北海道の拓殖事業を企画することもまた快いことではないか。我々はこのような理想と希望をもって北海道の拓殖地を設けようと思ふものである。」

北光社一移住地選定と規約制定(1)

移住地選定

- ・当初は候補地として天塩国天塩川沿岸を想定していたが、後にこの地が御料地であることもあり、道庁技師内田壽(土佐出身、札幌農学校第一期生)の助言を得てクネツ原野を新たな候補地に定めた。明治29年8月、坂本は澤本楠弥、前田駒次(蒲臼・聖園農場)とともに現地調査を行い、この地に決定した。
- ・農場は当初3か所に設定したが、最終的には二か所、即ち、第一農場—クネツ原野、358万坪(現北見市)、第二農場—野花南(現芦別市)51万坪に設定した。

北光社一移住地選定と規約制定(2)

「北光社規約」①(明治30年1月26日高知市の総会で制定)

- ・目的は「拓殖事業」である。
- ・資本金(当初9万円、出願時には7万5千円に減額)の出費は年度ごとの分割出金、その支出額は本人の申し出による(第3条)。
- ・役員は社長、副社長、理事、農業技師、事務員、雇人である(第9条)。
- ・総会は正副社長と代議員3名から構成され、毎年1回定期総会が開かれる。この代議員は出資金500円を1個の投票権として40個の投票権を代表する(第7条)。

坂本直寛の家族写真



旭川における直寛一家(明治36年3月ごろ)



坂本直寛の写真



坂本直寛の孫、坂本直行の絵(六花亭包装紙)



北光社農場跡に建てられた記念碑(北見市)



前田駒次の像(北見市)

